

かべをこわせ！

中 三

私の祖母はとても頑固だ。

歳を重ねるごとに頑固になっていき、家族の間にはいつの間にか「おばあちゃんに何を言ってもだめ。」という考えが浸透していた。私も自然と祖母と会話をするのが減っていった。

それでも、私は祖母が大好きだった。

祖母は私が幼いころから、共働きの両親の代わりに、優しく面倒をみてくれた。だから、私は少しぐらい祖母が家族からよく思われていなくても、祖母のことを大好きでいたいと思っていた。

しかし、私にも祖母との関係に大きな溝をつくる出来事があった。祖母とコンビニエンスストアに行ったときのことだった。祖母は、会計の際に店員の態度が悪いと注意をした。実際にはその人に問題はないように見えたが、祖母は大きな声で怒鳴り続け、結局店長だという人が出てくるまでの騒ぎになってしまった。

一緒にいた私は必死に制止したが、話を聞いて

もらえなかったもので悲しくなった。同時に恥ずかしいとも思った。店にいた人は、祖母のことをどう思ったのだろうかと考えると嫌な気持ちになり、祖母と一緒にいることで、こんなことになるなら距離を置きたいと思った。

でも、このときの私は、なぜ祖母が怒っていたのか聞くことをせず、勝手に嫌な気持ちになっていただけだった。

祖母と距離を置いてからしばらくして、私は老人ホームでのボランティア活動を体験した。私が体験させていただいた所は、特別養護老人ホームといい、入居している方の多くは寝たきりだった。

ボランティア活動中に、私が一番大変だと感じたことは、入居者さんとの会話だ。入居者のAさんは、部屋から広間へ移動しなければならぬときでも、「嫌だ。」の一点張り。私はどうすればいいのか分からず、職員の方に助けを求めた。

職員のBさんは優しく、

「どうして嫌なの。」

とAさんに声をかけた。すると、Aさんは、

「トイレ、トイレ。」

と言った。

この会話を聞いて、Aさんは移動することが嫌

だったのではなく、トイレに行きたかったのだと、私は気が付いた。私は、とても恥ずかしくなった。私はAさんに対して、一方的に、移動しなければならぬと言っていただけで、どうしてAさんがそれを拒むのかを聞こうとしなかった。それどころか、「嫌だ。」としか言わないAさんに苛立ちさえ感じていたのだ。

そんな私に職員のBさんは、

「入居者さんの言動一つ一つに意味があるから、『ダメ。』って諦めないで会話してみしてほしいな。」

と言ってくれた。

私は、Bさんの言葉で、祖母に対しても自分で勝手に諦めていただけだと気が付いた。コンビニエンスストアで祖母が怒った日も、私はただ、「おばあちゃん、やめて。」

と言うだけで、祖母が怒った理由を聞こうとしないなかった。それなのに私は、祖母に対してかべをつくっていた。会話をし、お互いに気持ちを伝え合う前に諦めてどうするのだろう。

今、私たちは「高齢社会」と呼ばれる時代を生きている。私は、祖母や老人ホームの人々との関わりを通じて、「高齢者」と言って高齢の方々との

間にかべをつくってしまっているのだろうかと考えようになった。私もはじめはそこのかべをつくっていた一人だったが、かべは気持ちを伝え合うことなくすることができた。祖母はコンビニエンスストアで、からの有無を店員が確認できなかったことが頭にきたと私に教えてくれた。また、最近感情の制御が難しいと感じていることも伝えてくれた。私は、そのことも全部含めてこれから祖母と一緒に悩んだり考えたりしていきたい。

高齢者だから、という理由で相手を理解することを諦めない。私たちは人と接するとき、相手の気持ちを理解しようとする。それは、誰に対してもそうあるべきだと私は思う。

そして、いつか私が祖母と同じ年齢になったら、年齢や人種、性別、全部関係なく誰もが笑って話し合えることが当たり前前の社会になっているように、私はこれから自分の考えを伝えていきたいと思う。

私の祖母は頑固だ。

最近また頑固になって、野良猫を自分の猫だと言ひ張りだした。

でも、そんな祖母と、どの猫がうちの猫かと言ひ合いのけんかをするのも、実は結構楽しい。